スライド 01



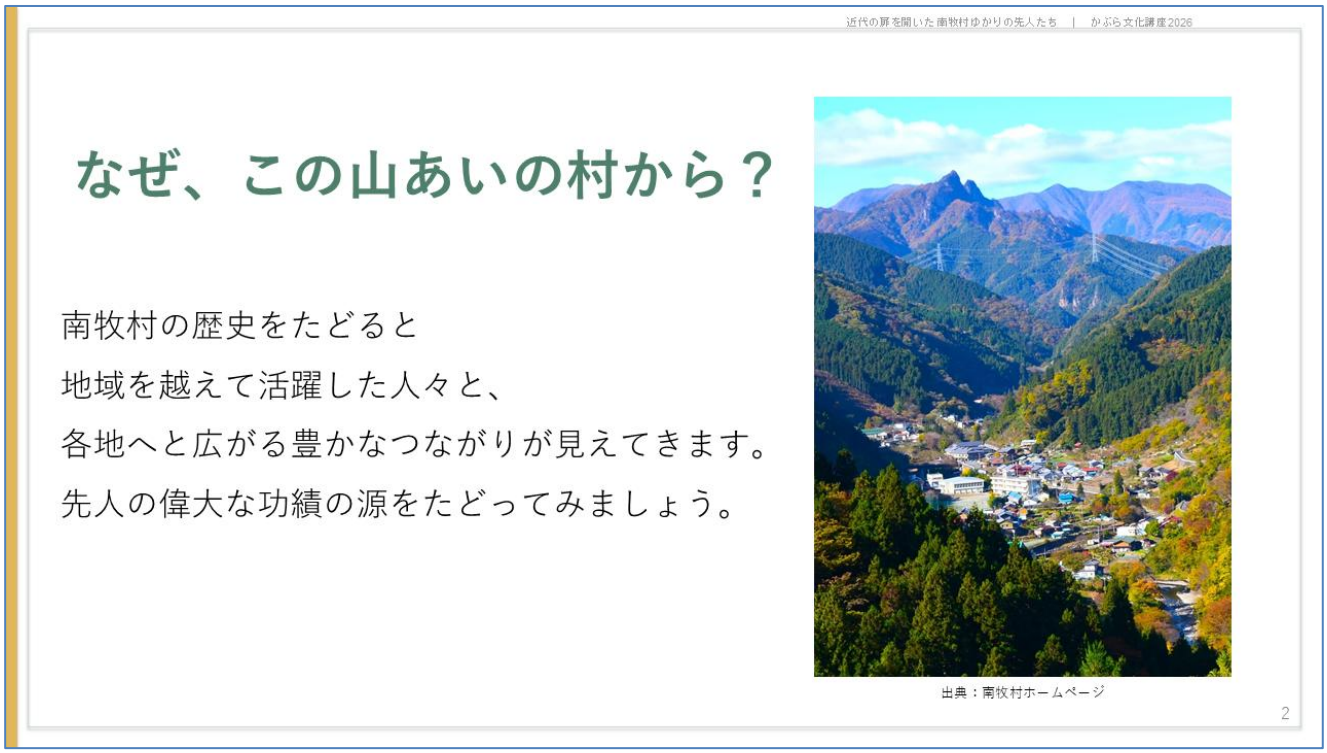
解説

南牧村の歴史は山あいの村の中だけで完結するものではありません。南牧にゆかりを持つ人々は、信州佐久平の用水開発や水戸の三大用水開発、そして越後での大規模な新田開発、そして江戸の学問と書道、さらには明治の地方行政や教育の指導者として活動の場を広げました。

本講演では、その歩みを「関係力」という視点からたどります。ここでいう関係力とは、土地に蓄積された技術や知識を、人と人とのつながりを通して地域の外へ運び、新しい仕事を生み出す力です。

先人の功績をそれぞれの地域で振り返って見ていきます。

スライド 02



解説

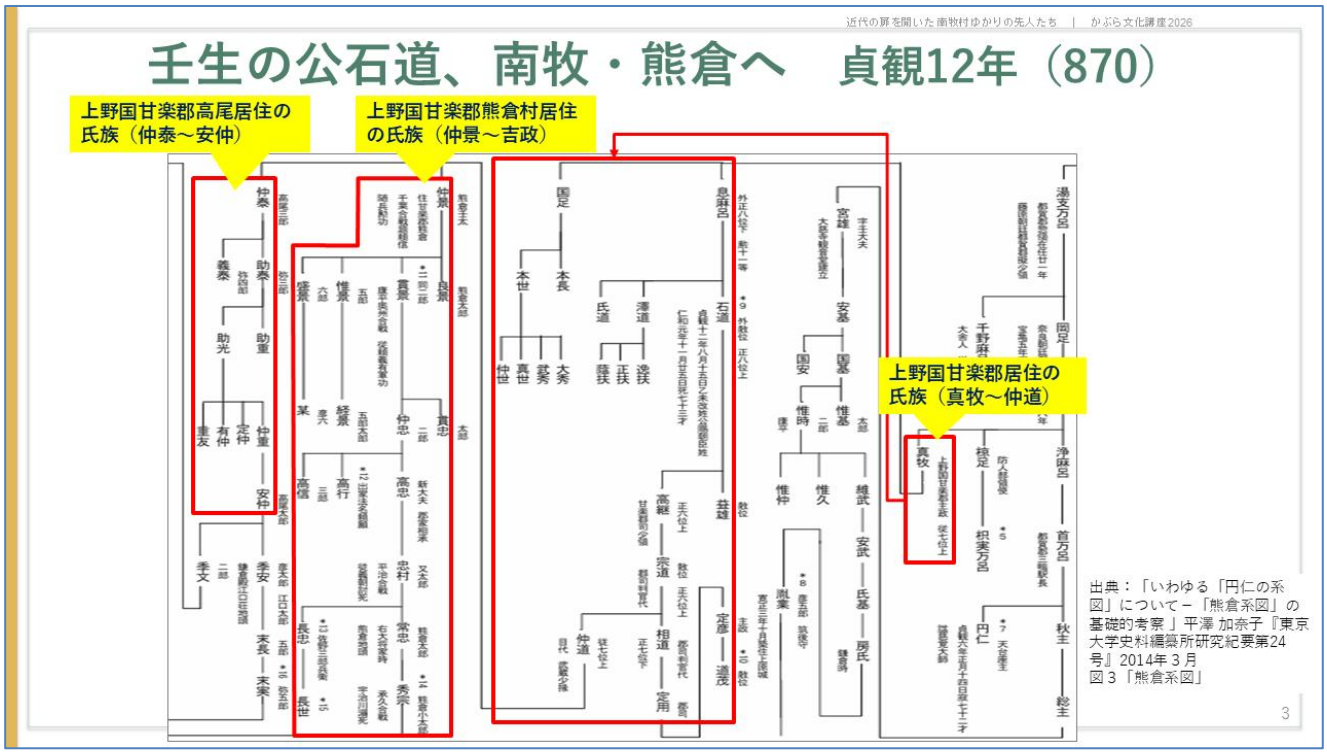
山と山に囲まれているということは、決して外の世界から切り離されていることを意味しません。古代、南牧谷や隣接する甘楽郡、そして峠を越えた信州佐久平は、朝廷の馬を飼育する重要な牧場である「勅旨牧（御牧）」のなかでも特に巨大な牧場の所在地でした。

草食動物である放牧馬の命を繋ぐには大量の塩分が必要であり、この南牧谷と幾筋もの峠道を通じ、太平洋側や日本海側から「海の塩」が、また南牧の砥石が佐久へ、そして東信濃からは大量の米が甘楽郡を通じて関東へと運ばれていました。

つまりこれらの古道は、単なる庶民の生活路だけではなく、御牧を支える物資輸送を裏から支えるための物資や人が行き交う重要な交通路だったのです。峠道は、物資に加えて人や最先端の情報、そして後にこの地を拠点とする新田氏や市川氏へと繋がる武士たちの移動とも関わる道でもありました。

こうした環境では、地域の産物を生かす知恵と、他地域との高度な交渉が強く生活を支えました。南牧ゆかりの人々の広域的な活動を理解するには、村の規模だけでなく、古代の勅旨牧の時代から連綿と延びていた道と交流に目を向ける必要があります。

スライド 03



解説

『日本三代実録』の貞観 12 年（870 年）に、上野国甘楽郡の壬生公石道（みぶのきみ いわみち）が朝臣（あそん）の姓を賜ったとあります。甘楽郡の壬生氏の存在を確認できる重要な公的記録と言えます。その後の壬生氏の足跡として「熊倉系図」には、12 代壬生仲道が甘楽郡司判官代として熊倉村（現在の南牧村熊倉周辺）に移住したこと、13 代仲景に至って源頼信に従い千葉合戦で武功を挙げ、のちに 14 代兄弟が甘楽郡高尾(現代の富岡市)へ移住したことが記されています。

この古代壬生氏と中世熊倉氏を結ぶ系譜こそ、古代壬生氏と熊倉周辺を結びつける系譜を伝えています。

また、古代の御牧(南牧塩野牧)について言えば、壬生氏の熊倉移住と御牧・塩供給との関係については、一つの可能性として考えることができます。当時、ここには常時約 600～700 頭もの朝廷の馬がいたとされています。近年の動物考古学の研究（菊地大樹氏らの科研費研究など）が指摘する通り、草食動物である馬の命を維持するには日常的に塩分の補給（給塩）が不可欠です。これを当時の塩野牧の頭数で計算すると、消費された塩の総量は以下の通り、相当量の塩が必要だったと推定されます。

・1 日あたりの消費量： 約 30kg ～ 70kg

・1 年あたりの消費量： 約 10 トン ～ 25 トン

こうした大量の塩をどのように安定して供給・管理していたのかを考えると、甘楽郡の壬生氏の存在と御牧との関係は、注目すべき興味深い要素といえます。。

スライド 04



解説

鎌倉時代の板碑が甘楽町小川と、富岡市下高尾に「仁治の碑」として残されています。左の甘楽町の碑には仁治 3 年（1242）、右の富岡下高尾の碑には仁治 4 年（1243）という別々の年代が刻まれています。

この板碑の建てられた仁治年間（1240〜1243 年）から宝治合戦（1247 年）の頃、上野守護職安達氏は、北条得宗家の外戚として幕政の中枢（評定衆や引付衆）へ急速に昇り詰めています。その背景には、北条得宗家の外戚として勢力を伸ばした安達一族の繁栄がありました。

[出典：『高崎市史 通史編 2 中世』（高崎市、2000 年刊）］ 該当箇所： 第 1 章第 4 節「国衙・在庁と守護安達氏」など

また、平澤論文によれば、富岡市下高尾に現存する仁治４年（1243 年）の銘文を持つ板碑に刻まれた二十余名の姓名のうち、壬生姓５名の人々は「熊倉系図」に残された人名と一致することが確認でき、11 世紀に熊倉と富岡に居住を分けた人々が、13 世紀においても依然として一族としてのつながりを保っていたと考察しています。

石碑は、家の由緒とは異なるかたちで中世の人々の確かな存在を伝えています。

[出典：平澤加奈子『いわゆる『円仁の系図』について』](https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo/24/kiyo0024-02.pdf)

スライド 05



解説

南牧村千原の天台宗慈眼寺の開基は、鎌倉時代『曽我物語』の曽我兄弟の縁者による開基との伝えがあります。

この曽我兄弟の子孫とされる有坂氏の活躍の記録が信州佐久市、上田市武石に残り、やがて有坂氏は安積系の島津氏と共に『蒙古襲来絵詞』の中に勇壮に描き残される活躍をしています。

［出典：斎藤哲次郎『有坂史』昭和 60 年 8 月清水書店 176 頁「有坂と有坂氏」］
［出典：上田市『上田市史歴史偏(4)』平成 13 年 10 月 120 頁「有坂氏など薩摩氏の一族」］

蒙古襲来の頃、上野国守護職の安達氏は、鎌倉幕府最高政策決定機関である評定衆（ひょうじょうしゅう）や、訴訟処理を行う引付頭人（ひきつけとうにん）などの重職についていたため、この蒙古襲来という国難に際し、上野国の武士たちも蒙古襲来に際して九州へ出征しました。そのため玉村氏などの上野武士団の活躍が『蒙古襲来絵詞』に残されています。

［出典：相田二郎『蒙古襲来の研究』昭和 33 年 2 月株式会社吉川弘文館　236 頁］

スライド 06



解説

正平 13 年（1358）、新田義貞の子・義興は、多摩川の矢口の渡しで敵方の謀略により非業な最期を迎えます。このとき市川五郎兵衛の祖先・市川五郎も壮烈な殉死を遂げます。

この頃、足利氏の本拠地足利と渡良瀬川を挟んだ現在の桐生広沢にいた五郎の遺族と家臣は、足利勢からの迫害から逃れるため、五郎の幼子を守りながら一旦は渡良瀬川を遡り足尾に身を避難します。が、その後生活の安定を図るため、もともと関係の深かった甘楽郡南牧に移ります。

この悲劇を『太平記』は、義興一行が策略によって舟上で襲われたと語っています。その死は、関東における南北朝の抗争を伝える出来事として記憶され、平賀源内により歌舞伎・人形浄瑠璃の演目「神霊矢口渡」として描かれ、傑作として知られています。

東京都大田区の新田神社は義興を祀り、境内の十寄神社は市川五郎たちを弔うという伝承が残ります。

南牧の市川家が伝えてきた祖先の物語も、この広い新田氏関係の歴史の中に位置付けられます。

[出典：東京都教育委員会『東京の文化財』第 124 号](https://www.syougai.metro.tokyo.lg.jp/image/tokyobunkazai124.pdf)、[新田神社「御由緒」](https://www.nittajinja.jp/history.html)

スライド 07



解説

入間市の愛宕神社にも、新田義興と家臣たちを祀る歴史が伝えられています。社伝では正平16年（1361）に義興と家臣たちの霊を祀ったとされ、境内には義興と殉死した家臣たちの首を埋めたと伝える「首塚の松」があります。

矢口の渡しから離れた入間にこうした伝承が残るのは、当時入間川に陣を構えていたのが鎌倉公方・足利基氏であったことから、入間が関東の政治・軍事と深く関わっていたためです。

首塚や祭礼は、出来事そのものの記録であると同時に、後世の人々が死者をどのように受け止め、地域を守る存在として祀ってきたかを物語ります。

[出典：入間市博物館「愛宕神社」](https://www.alit.city.iruma.saitama.jp/irumashiseiyoukan/atagojinja/)

スライド 08



解説

市川家の由緒を記す『市川中興家譜』に、五郎兵衛の祖父・真貞 22 歳は永禄元年（1558）信州芦田の地下の乱で亡くなったと記されています。この時一子眞久は僅か 2 歳、武田信玄・小幡信定公がいたく御哀傷されたと残されています。

当主を失うような厳しい戦の繰り返しの中、永禄 3 年（1560）に南牧の市川一族は武田信玄から勅使牧佐久望月の牧の中枢部分、そして一遍上人ゆかりの小田切郷、平賀氏の遺領の瀬戸、三分、海瀬、高野町、崎田などが与えられています。

この記録から市川氏が南牧だけに留まらず、武田氏との関係を通じて佐久にも広く足場を持っていたことが分かります。後の五郎兵衛による佐久進出の背景には、戦国期以来の土地との縁がありました。

用水開発の歴史の前には、一族が戦乱と肉親の死を経験した歴史が重なっています。

[出典：『市川家中興家譜』（寛永 8 年東大史料編纂所蔵　明治 19 年謄写写本）

スライド 09



解説

南牧ゆかりの歴史を、本講演では三つのつながりから読み解きます。「水」は用水と新田を通して暮らしを支えるつながり、「知」は学問や書を学び伝えるつながり、「人」は地域や立場を越えて事業を進めるつながりです。

これらは別々のものではありません。工事には技術と資金が必要であり、学問には師弟や蔵書の交流が必要でした。

政治や産業を担う人物も、学びと交際を重ねて育ちました。人々がどこで出会い、何を持ち寄ったかを見ることで、個人の業績を地域の歴史として理解できます。

スライド 10



解説

五郎兵衛の用水開発は戦国期の地域勢力が近世社会の中で、新しい役割を担っていく良い一例として、また近世土豪開発型用水の始まりとして加賀の辰巳用水、静岡の箱根(深良)用水と共に日本三大用水に数えられることもあります。

[出典：『加賀辰巳用水東岩隧道とその周辺』（1989 年／加賀辰巳用水東岩周辺調査団）]

用水開発の手法として、佐久では水の届きにくい高台へ用水を導くことが課題であり、一方、越後の大濱郷では、湿地に滞留する水を排出し、農地として利用できる状態に変えることが必要でした。

両者は全く異なる地形に向き合った事業ですが、人が住み続けられる土地をつくるという点で共通しています。用水開発は、水路だけでなく、耕地と集落の成立を伴う仕事だったのです。

[出典：佐久市五郎兵衛記念館「第 24 回近代水道と五郎兵衛用水について」『館長の豆知識(佐久市ホームページ）（https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/mamechisiki/mamechisiki24.html）

[出典：新潟県「上越地域における新田開発のあゆみ」](https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/jouetsu_norin/1356862346596.html)

スライド 11



解説

市川五郎兵衛も茂田七左衛門も、用水路の勾配をおよそ 0.1%～0.05%（1,000m 進んで 1m～50cm 下がる程度、1/1,000～1/2,000 勾配）前後という極めて高水準の測量術を駆使していました。

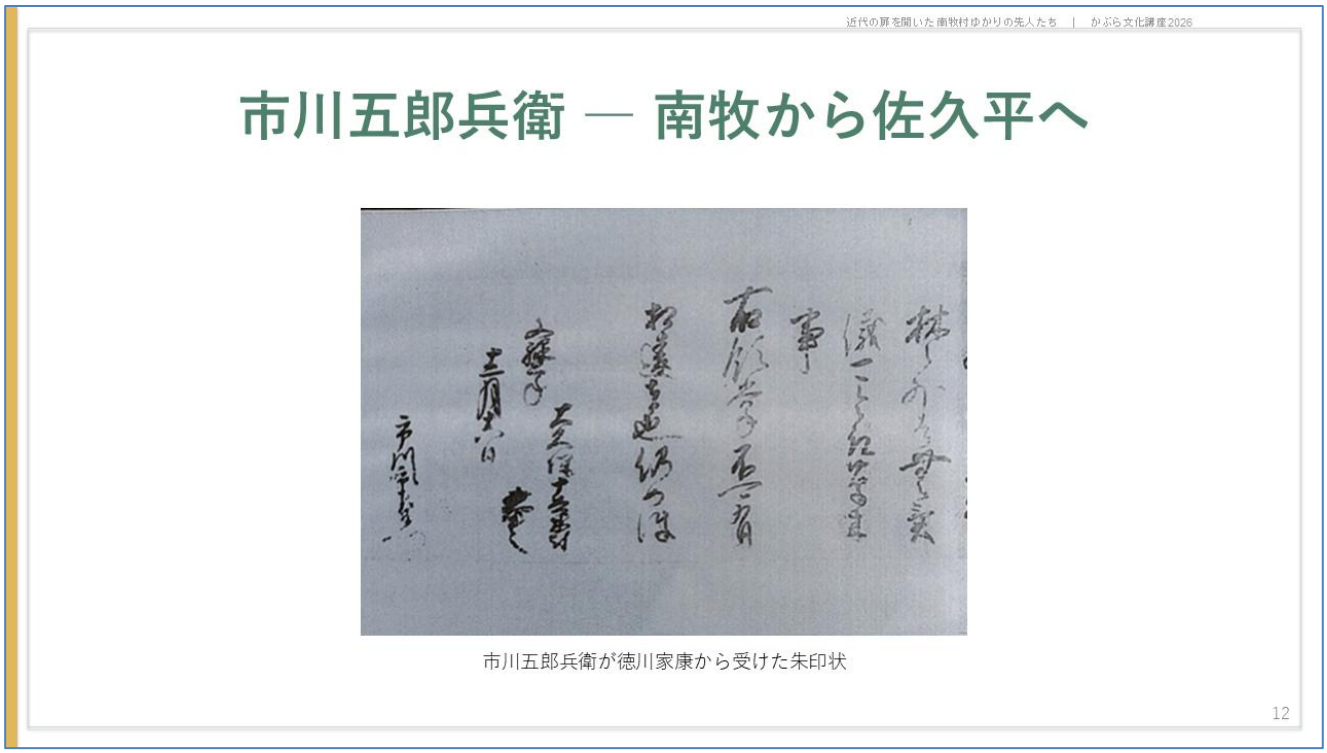
この測量術が可能だったのも江戸時代初めの南牧に数学・水利法・鉱山学があったからです。

また市川五郎兵衛の優れた隧道内での水利術の一つは、あえて屈曲して掘削した隧道のカーブの内側部分を、大きく思い切り削り取ってあることです。五郎兵衛は水の流れ、水の性をよくよく熟知し、隧道内の水の渦や摩擦について驚くべき対策を講じています。この技術はその後、日本三大用水の深良(箱根)用水でも用いられています。

そのほかにも五郎兵衛の画期的な用水施工技術として、揚水伏せ越し(逆サイフォン)があります。この技術はその後、日本三大用水に例えられる金沢辰巳用水、そして茂田七左衛門の越後大濳用水でも取り入れられています。

講演の資料冒頭に 1,200 年にわたる南牧の古代から中世への歴史をあげましたが、南牧の人々が何故このような大規模事業を成し遂げられたのかというと、この地域がやはり古くから外の世界と繋がっていたことが確かだったからです。

スライド 12



解説

市川五郎兵衛家と同族の市川半兵衛家に、文禄 2 年（1593）12 月 16 日付の徳川家康朱印状が伝わります。この文書には金鉱の採掘や採鉱、森林資源の自由な利用、領民の呼び戻し令が記され、文末には市川五郎兵衛と大久保十兵衛長安の名が見えます。

［出典:徳川家康朱印状（文禄二年十二月、長野県佐久市・市川育英氏所蔵）］

朱印状の許可のうち、領民呼び戻し令とは『他所に逃げてしまった領民たちを連れ戻し、もう一度みんなで故郷を豊かにしてよい』という、復興の絶対的な許可が書かれていたのです。

この朱印状は、五郎兵衛の事業が徳川家康の特別な承認と結び付いていたことを示す重要な史料です。山や土地を開発するには技術と資金だけでなく、権利の裏付けが必要でした。

その承認を家康が市川一族に与えたのも、共に新田の悲劇、南朝の悲哀、豊臣氏との大坂の陣を潜り抜けてきた、南牧の人たちと家康の家との深い関わり合いがあってのことです。

［出典：菅原兵治『市川五郎兵衛眞親』金鶏学院　昭和５年 11 月］

後に小諸藩による矢嶋原の開発許可に当たっても、戦国の時代に共に困難な日々を過ごしてきた依田氏・平尾氏・大久保氏のお蔭で、具体的な用水・新田事業へ進んだと理解できます。

［出典：佐久市五郎兵衛記念館「第 30 回時代を変えた家康からの朱印状」『館長の豆知識(佐久市ホームページ）（https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/mamechisiki/mamechisiki30.html

スライド 13



解説

佐久の近世初期を考える際には、水不足とともに、戦乱や洪水による生活基盤の損失にも目を向ける必要があります。江戸時代の郷土史家・吉澤好謙は『四隣譚藪』に、戦乱による岩村田の荒廃や、人々が土地を離れた「佐久郡一郡逃散」の話を残しました。

[出典：吉澤好謙『信濃史料叢書第８巻』信濃史料編纂会 1912 年『四隣譚藪』]

この記述は後世から振り返った地域の歴史ですが、人々にとって安定した居住と耕作が切実な課題だったことを伝えています。用水と新田を築くことは、収穫量を増やすだけでなく、家族が定住し生計を立て直せる場所をつくることでもありました。

[出典：佐久市五郎兵衛記念館「第８回 がんばろう佐久」『館長の豆知識』（佐久市ホームページ）](https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/mamechisiki/mamechisiki08.html)

スライド 14



解説

五郎兵衛は、佐久で元和年間に常木用水・三河田用水の二つの用水の開発に成功した後、寛永 3 年（1626）に五郎兵衛用水の開発を許可されました。五郎兵衛用水は約 5 年にわたる工事期間を経て、寛永 8 年（1631）に完成しています。

五郎兵衛がこの事業に着手したとき、彼はすでに 50 代の時期でした。それまでに五郎兵衛は 22 歳の時、江戸城で徳川家康に殖産興業の願いを訴え朱印状を受け、秋元但馬守のもとで「天狗岩用水」の開発の現場に学び、用水開発資金対策として砥石山鉱山経営に関わって、その後の用水開発の長期間の工事と多額の支出を伴う事業に取り組んだことになります。完成した水路の先には、耕地を開き、村の暮らしを整える仕事が続いていました。

[出典：八十二文化財団「五郎兵衛用水」](https://www.82bunka.or.jp/bunkazai/detail.php?no=2169&seq=)
[出典：佐久市五郎兵衛記念館「第 24 回近代水道と五郎兵衛用水」『館長の豆知識』（佐久市ホームページ）](https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/mamechisiki/mamechisiki24.html)

スライド 15



解説

五郎兵衛用水には山を貫く隧道や谷や川を越す掛樋、地面を盛り上げて水路を高くする「築堰」など、地形に応じた様々な工夫が用いられました。

鹿曲川で浸食された垂直岸壁の中へ用水隧道施工では、工期短縮と現場管理費の低減を図るため複数カ所での同時施工を行っています。

その現場施工では複数カ所において、岸壁内の水路の通過する予定地点までの壁面から掘削を行い、予定地点に達すると、今度は左右に分かれて上流側へ登り勾配、下流側に向かっては下り勾配で掘削を進め、それぞれの箇所で連続させるという極めて高度な測量術がうかがえます。岩盤中にピタリと隧道予定路線を探し当て、また上流側、下流側の水路接合高さを合わせるという技術管理は、五郎兵衛用水が日本 3 大用水の一つに例えられる大きな理由です。

また、片倉山堀抜隧道総延長 360m の施工では、隧道の入り口側の片倉地籍から下り勾配、隧道出口の布施地籍からは登り勾配で同時に起工し、中間点で合流させていることです。

また施工にあたっては高さ 1.8m、幅 1.5m で、岩天井はふっくらとした曲線を描き、また底部は段差を設けるなど、強度と水勢を極めてよく考えた施工がされています。

用水途中の低湿地帯での施工では、軟弱地盤層に最大 4.5m の高さに、現場発生の泥状土を用い、漏水に耐える水路施設を施工しています。

[出典：伊藤一明『五郎兵衛と用水』信州農村開発史研究所 1982 年 10 月]

スライド 16



解説

五郎兵衛の用水開発は、五郎兵衛新田だけに限られません。常木用水、三河田用水でもそれぞれの地域の耕作と暮らしを支えてきました。図中の「四ケ用水」は、三河田堰に対応する名称です。

千曲川と内山川、蛇場川という 3 つの河川に囲まれ、古代から栄えていた三河田村は、その河川の氾濫により集落と農耕地が流失してしまい、人々は新たに安全な高台へ五郎兵衛の助けを借り新たな用水を開発し、生活を再建し新しい村を築いたと伝えられます。

水路は、農地を潤すと同時に、より安全な場所で暮らす選択を可能にしました。三つの用水を並べて見ることで、五郎兵衛の事業を佐久各地の生活再建として捉えることができます。

[出典：佐久市五郎兵衛記念館「第 30 回世界かんがい施設遺産『五郎兵衛用水』と地域の用水」『館長の豆知識』（佐久市ホームページ）」](https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/mamechisiki/mamechisiki30.html)

スライド 17



解説

五郎兵衛の用水開発は、2018 年に国際かんがい排水委員会による「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

用水の価値は、昔の姿が残っていることだけではありません。修理や改良を重ねながら、地域の農業を支える役割が受け継がれている点にあります。開発者の仕事と、その後の世代による維持管理が一つになって、今日の歴史遺産を形づくっています。

[出典：佐久市「『世界かんがい施設遺産』に登録」](https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/gorobee.html)

スライド 18



解説

塩沢用水は江戸時代初期の正保 3 年(1646)に、水不足に苦しむ蓼科山麓の未開の大地のために、初代 六川長三郎が市川五郎兵衛と同じく全額私財を投じて開発した、約 55km に及ぶ歴史的な農業用水です。

この開発予定地は、南牧の環境や玉川上水とか大濠用水が砂地での施工とはまったく異なり、標高 1000 メートルという厳しい自然環境の高地で、また目の前には八ヶ岳の巨大な溶岩流が固まった頑丈な岩盤が立ちはだかるという、極限の自然環境下での測量と施工でした。

この困難な工事を実質的に主導し、現地で開発者六川氏を支えたとされるのが市川平右衛門です。彼は、かつて南牧に住み込んで高度な測量や開削の技術を学び、その磨き上げた技術をもって溶岩地形を含む地域での用水開発に携わりました。

この、誰も知らなかった歴史の裏にある「南牧の技術の凄さ」と「五郎兵衛の志のつながり」は、のちに平右衛門の子孫である市川養夫氏が著書を出版したことによって、初めて世に知られることとなりました。

「日本の疏水 100 選」に選定されている「塩沢用水」は、六川長三郎よる開発と、南牧の地で培われた市川平右衛門の確かな技術力という両者の協力によって進められ、現在の豊かな農地はその用水開発の成果を現在に伝えています。

[**出典**：市川養夫『黎明・信州佐久郡塩沢新田市川氏系譜』私家版、昭和 53 年、47 ページ]

スライド 19



解説

南牧の優れた治水技術の歴史を語る上で、もう一人忘れてはならないのが永田氏の存在です。

彼らは代々、治水技術者としての由緒を示すものとして市川五郎兵衛の朱印状（写し）を家名の誇りとして大切に護持してきました。

しかし、この朱印状には興味深い点があります。実はこれが「丸写しの写し」であることは世間にほとんど知られていません。かつて塩山市の甲斐黒川金山遺跡の総合調査において、研究者がこの書状を調べた際、永田氏が黒川金山にいたとしたら「この時代、山梨の領主が発給するであれば浅野氏のはずなのに、なぜ家康の朱印状なのだろうか」と頭をかしげたという、極めて興味深い逸話が残されています。

［出典：黒川金山遺跡研究会『甲斐黒川金山』塩山市平成 9 年 208 ㌻「第 3 章古文書から見た黒川金山と金山衆」］

このような歴史の謎を秘めながらも、永田氏はその後、茨城の地で水戸藩の用水開発に携わりました。その後、永田氏は水戸藩に仕え、茨城の地で用水開発に携わりました。やがて大規模な用水開発を成し遂げます。

それが、大干ばつに苦しんでいた広大な穀倉地帯を救った水戸藩の最高峰インフラ、「三大江堰（辰ノ口江堰・岩崎江堰・小場江堰）」の建設と、水戸城下の大水道である「笠原水道」の敷設です。那珂川や久慈川という暴れ川を制御し、数十キロに及ぶ大用水路を通して地域一帯を豊かな美田へと生まれ変わらせたスケール感は、日本の土木史上に残る偉業です。

五郎兵衛の朱印状の写しが永田家に伝えられたことは、南牧周辺の技術者と各地の開発とのつながりを考えるうえで興味深い事例です。

スライド 20



解説

江戸時代初めの現在の上越市の旧頸城村の場所には、海岸砂丘に排水を妨げられた広大な潟湖や、大濳(おおぶけ)と呼ばれた際限無く続く低湿地帯が広がっていました。

寛永 14 年（1637）に南牧村千原重田家出身の七右衛門は、一族の富岡市一ノ宮の神戸三郎左衛門、茂田喜左衛門、松本作兵衛とともに、高田藩へ新田開発を出願しています。

[出典：南牧村史編纂委員会『南牧村史』昭和 56 年 3 月南牧村　教育文化編 7 人物]

寛永 15 年（1638）に工事が始まり 6 年の歳月の後、正保元年（1644）正月に漸く約 20ｋｍに及ぶ大濳用水の開鑿と、大濳と呼ばれていた大低湿地帯の干拓、そしてサイフォンの原理を利用した水路の立体交差など大土木事業を成功させ 40 もの村が成立しました。

茂田氏は新しい村の名前に「千原村」、神戸氏は「神原村」と故郷の地名を残していますが同郷の松本作兵衛は工事の完成を見ることなく異郷の頸城の地で病没してしまいます。しかし、同僚たちは松本の名前を村に残し密かに顕彰しています。

この開発は領主の計画、商人の資金、技術者の経験が結び付いた大事業です。

[出典：新潟県『新潟県史資料編 6 近世①上越編』昭和 56 年 3 月新潟県　第 5 節水利と新田開発、頸城村『頸城村史』昭和 63 年 2 月頸城村　第 2 節大濳郷の新田開発、頸城村『頸城村史資料編』昭和 63 年 2 月頸城村 第 3 章近世、頸城土地改良区『越後頸城郡大濳郷新田開発史』昭和 50 年 6 月　第 5 章大濳郷の新田開発第 1 講大濳新田の開発と大濳用水の開鑿]

スライド 21



解説

大潅郷の開発では、用水を引くのと同じくらい滞留する水を外海へ出すことが重要でした。

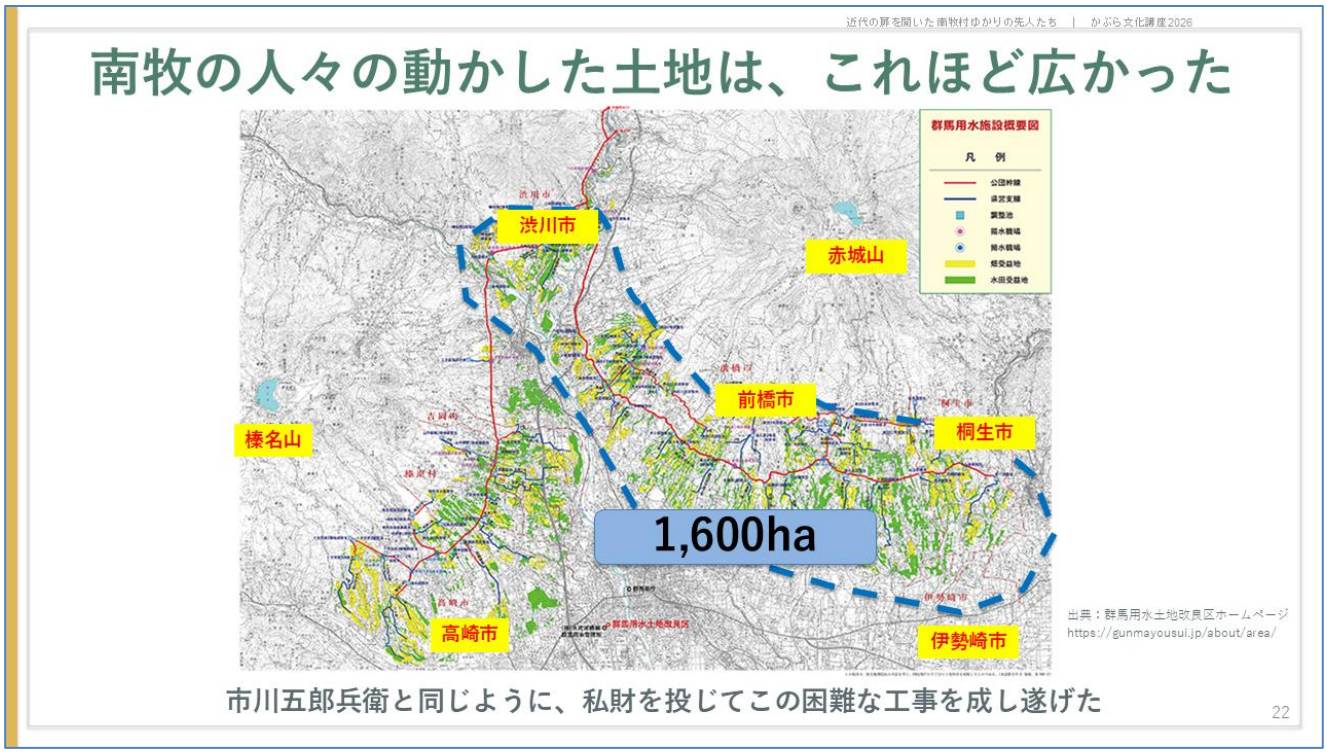
正保 3 年（1646）神戸三郎左衛門の義弟、平石彦左衛門と、同じく甥の上原八郎右衛門は、大潅新田北側低地の湛水排水工事を藩から命じられます。

工事では、砂丘に幅 14m 全長約 13 キロメートルの潟川という川を新たに掘り、また大潅新田北側の湛水を排水して干拓するという、この大工事は 10 年にも及び、36 の村の成立につながりました。さらに大潟の開発は進み、日本海に繋がっていた保倉川の河道を新たに関川へ合流するよう河川の切り替えには 6 年もの歳月を要して完成させています。

現在の頸城野の田園は、一度の工事で完成したものではありません。水の動きを見ながら、数十年にわたり手を加えた結果なのです。

[出典：新潟県『新潟県史資料編 6 近世①上越編』昭和 56 年 3 月新潟県　第 5 節水利と新田開発頸城村『頸城村史』昭和 63 年 2 月頸城村　第 2 節大潅郷の新田開発、頸城村『頸城村史資料編』昭和 63 年 2 月頸城村　第 3 章近世、頸城土地改良区『越後頸城郡大潅郷新田開発史』昭和 50 年 6 月　第 5 章大潅郷の新田開発第 1 講大潅新田の開発と大潅用水の開鑿]

スライド 22



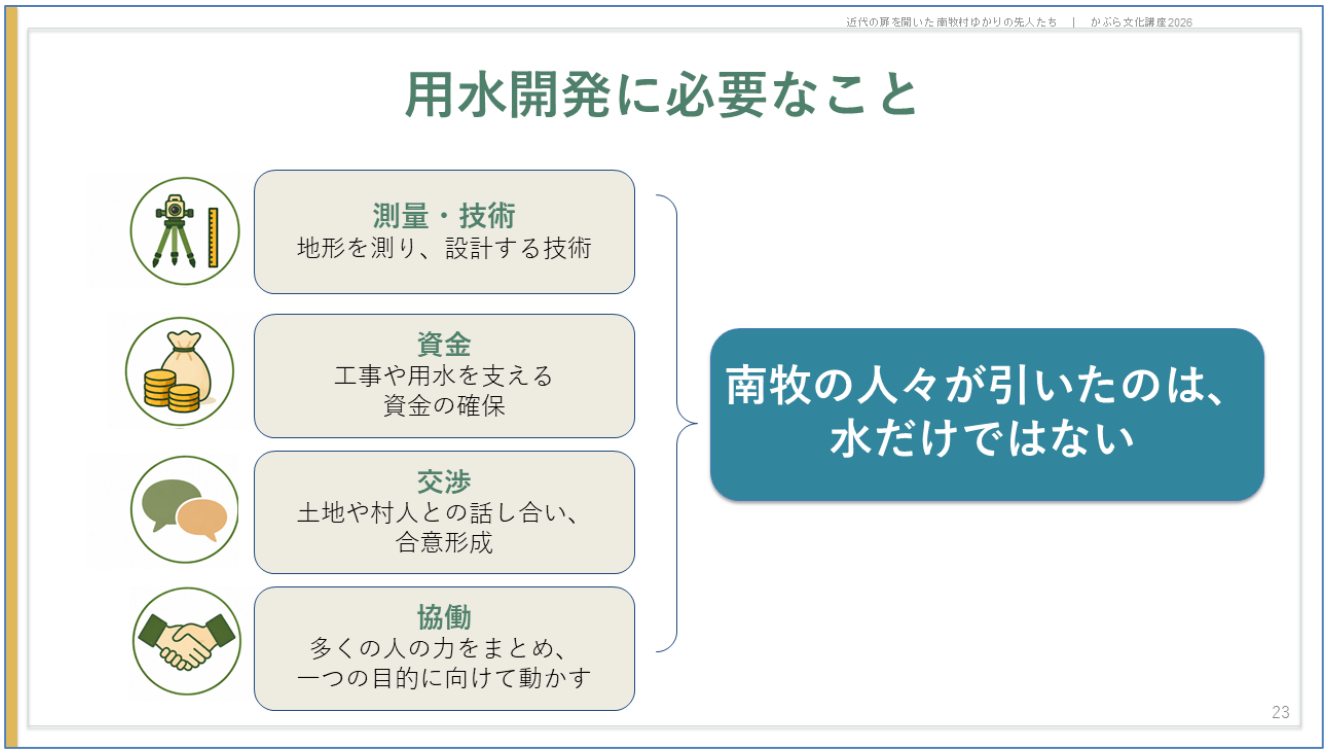
解説

新潟県の解説では、大潅郷の一連の開発によって、合計 100 か村、約 1,650 ヘクタールの新田が成立したとされています。面積に直せば約 16.5 平方キロメートルです。

この数字は、田の広さに加え、多くの世帯が生計を立てる基盤が生まれたことを意味します。用水路はその後も改修され、土砂崩れや水不足への対応が続きました。群馬県の地図との比較では、掲載区域がそのまま同じ面積を表すのではなく、広域の農業を支える事業の規模を考える参考として見ることが適切です。

[出典：新潟県「大潅郷に新田拓いた用水施設」](https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/jouetsu_norin/jn-ns-daiyougou.html)

スライド 23



解説

用水開発には、地形を読む技術、工事費を支える資金、土地や水の利用をめぐる交渉、そして働く人々の協力が必要でした。技術があっても、資金や合意が整わなければ工事は進みません。

この視点から見ると、開発者の大きな役割は、異なる能力を持つ人々を結び付けることにあったと考えられます。さらに完成後には、水の配分、浚渫、修繕を担う人々が必要です。地域に長く役立つ施設は、建設時の協力と、その後の共同管理の両方によって支えられています。

スライド 24



解説

南牧出身の市河寛斎は、下仁田の高橋道斎に学び、江戸の湯島聖堂に関わる学問の場へ進みました。学頭を務め、後には富山藩に招かれて教育に携わっています。

寛斎の歩みから分かるのは、地域での学びが、江戸や諸藩の教育へ繋がっていたことです。地方の師による指導、書物を読む力、学者との交流が、その道を開きました。

[出典：下仁田町「高橋道斎の墓」](https://www.town.shimonita.lg.jp/kyouiku/m02/m06/11.html)、[立命館大学「市河寛斎『全唐詩逸』の編集と刊行」](https://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/cl/koten/kanshi/nihon1_3.htm)

スライド 25



解説

南牧村大塩沢の黒滝山不動寺は奈良時代前期の開山と伝えられています。また、朝廷直属の軍馬育成場・勅使牧「塩野牧」に関する歴史も伝えられています。こうした古代の地域環境を背景として、黒滝山の成立を考えてみることもできるでしょう。

隣接する佐久「望月の牧」では、地元の神官・畠山忠雄氏が著書『勅使牧「望月の牧」その他』で佐久市八幡所在の八幡神社伝来の平安時代の鉄製鐘から望月牧と八幡神社の結びつきを証し、また佐久市望月の大伴神社神官金井重道氏も『望月氏の歴史と誇り』で大伴神社と牧の歴史の深さを述べています。

[出典：畠山忠雄「勅使牧「望月の牧」その他」昭和 50 年 9 月私家版 32 ㌻]
[出典：金井重道「望月氏の歴史と誇り」昭和 44 年 8 月私家版 167 ㌻]

黒滝山大塩沢の開闢もこれら信濃の牧と同じく古代国家と深く結びついていたと考えられます。

江戸時代、この霊場を中興した黄檗宗（おうばくしゅう）は仏教教団でありながら、檀家を持たず漢学、漢詩の教学、また仏閣造営のための土木事業など当時の最先端のテクノロジーを有した集団でした。彼らの高度な土木技術は、千葉の九十九里浜で大濩と同じような過酷な海岸沿いでの新田開発に関わり成功させた実績からも分かります。その技術で黒滝山の険しい岩山を切り開き、見事な伽藍を再興しています。さらに彼らは「出版」と「漢学」のプロであり、中興開山の潮音和尚は南牧の風土を漢詩に詠み、出版物として全国へ発信しました。この高い文化の土壌こそが、後に江戸の偉大な儒学者・市河寛斎、幕末の書家・市河米庵、近代英文学の市河三喜という、南牧村を本籍地とする日本屈指の知性の一族を生み出したのです。

[出典：宝林寺「黒滝山開堂」](https://horinji.or.jp/papers/3639)、[黄檗宗寺院紹介「黒滝山不動寺」](https://media.horinji.or.jp/%E9%BB%84%E6%AA%97%E5%AE%97%E7%BE%A4%E9%A6%AC%E7%9C%8C%E4%B8%8D%E5%8B%95%E5%AF%BA/)

スライド 26



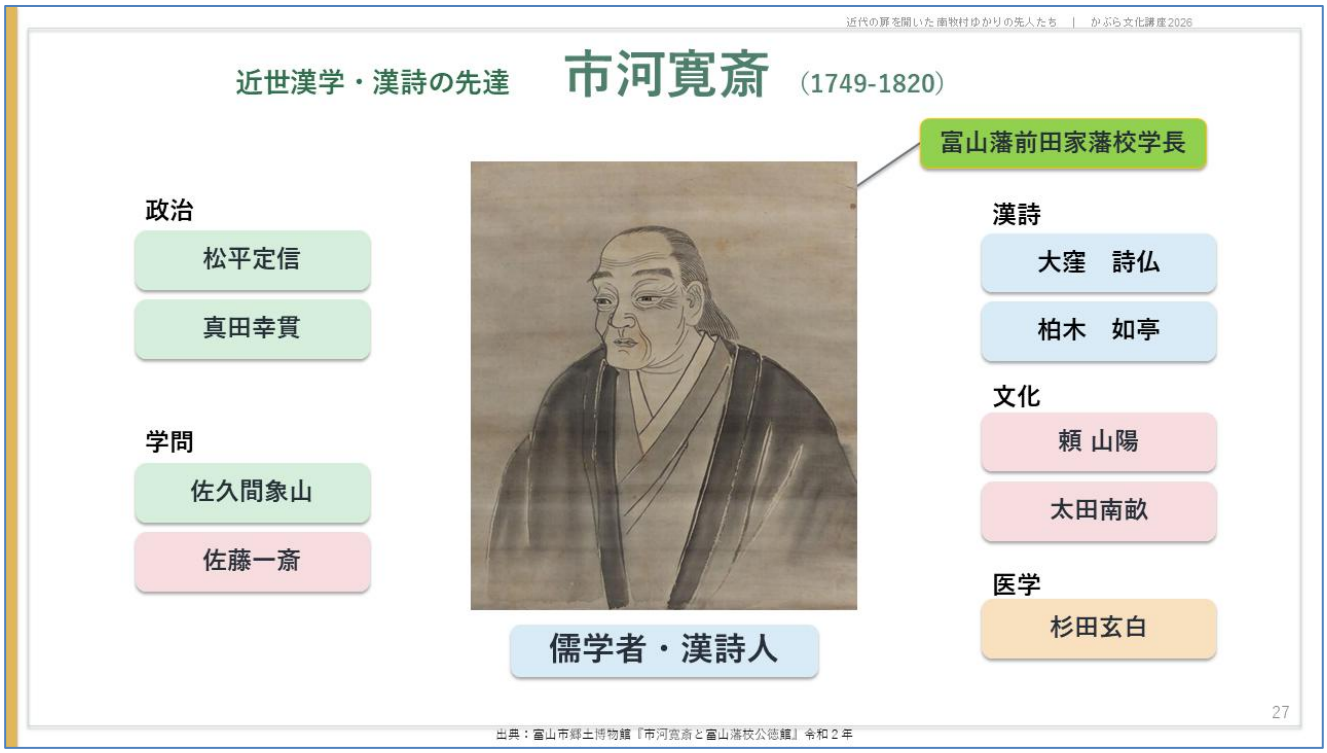
解説

高橋道斎は、下仁田に生まれた漢学者・俳人・書家です。多胡碑の歴史的価値と書の価値に注目し、江戸の書家・沢田東江とともに、その存在を広く紹介しました。

宝暦 4 年（1754）には東江を多胡碑へ案内し、宝暦 6 年（1756）の『上毛多胡郡碑帖』では校訂に関わっています。道斎の墓碑は、弟子の市河寛斎が文章を書き、東江が揮毫しました。一基の墓碑にも、郷土の学者、江戸の書家、次の世代の弟子という学問のつながりが刻まれています。

[出典：下仁田町「高橋道斎の墓」](https://www.town.shimonita.lg.jp/kyouiku/m02/m06/11.html)、**[高崎市・多胡碑関係資料]**(https://www.city.takasaki.gunma.jp/uploaded/attachment/30362.pdf)

スライド 27



解説

市川五郎兵衛の又甥の市河寛斎（1749～1820）は、出自の絶家していた大塩沢市川家を再興するため、仕官していた山形秋元藩を脱藩の形となってしまったため、本家羽沢市川家に遠慮し「市川」姓を「市河」姓に改めます。寛斎の仕事は、漢詩の創作と教育に加え、古い詩を集めて検討する研究にも及びました。日本の漢詩を集成する『日本詩紀』の編纂に取り組み、日本に伝わる典籍から中国で失われた唐詩を拾い集めた『全唐詩逸』でも知られます。

また江湖詩社を率い、その周辺から大窪詩仏や柏木如亭らが活躍しました。寛斎は学問を教える人物であるとともに、書物に残された知識を調べ直し、次の研究者へ渡す人物でもあったのです。

寛斎の功績を箇条書きにすれば

【功績１】幕府の最高学府である『昌平坂学問所』昌平黌学頭を務めたほか、また私塾を開くと、日本中から 3,000 人以上も押し寄せました。

【功績２】その門人・学統は幕末から明治の学問・文化へ広がり、勝海舟や福沢諭吉、渋沢栄一など、後世の知識人にも影響を及ぼしました。

【功績３】当時幕府の寛政異学の禁に際し、社会が従う中で寛斎は大批判し、昌平黌学頭の地位を失いますが、富山前田藩主が破格の待遇で藩校教授への就任を依頼しています。権力に屈しない、まさに上州人らしい強さを持った人でした。

【かぶらと寛斎】

寛斎は、高橋道斎はもちろんのこと、南牧羽沢の市川家当主に多く教えを受けたことが、彼の人生に大きな影響を残しています。**［出典：市河三陽『市河寛斎先生』平成４年あかぎ出版］**

スライド 28



解説

寛斎の子・市河米庵（1779～1858）も、父寛斎と同様に、生涯南牧の羽沢市川家を宗家と仰ぎ、南牧と深い交際を重ね、寛斎と同様におびただしい往復書簡を残しています。

号を米庵のほか、甘楽の象徴である妙義山にちなんで「金洞山人」とも名乗ったり、羽沢市川家の万平(後の竹井澹如)と共に妙義山への山行を楽しんだり、富山藩前田家学問所の学頭就任の際は、金沢行きの旅路で中山道倉賀野宿から道を変え、南牧羽沢まで家臣 16 名を従え、槍を掲げた乗馬姿で豪勢な行列を仕立て故郷に錦を飾ったりと米庵の人生に南牧は大きいものがあります。

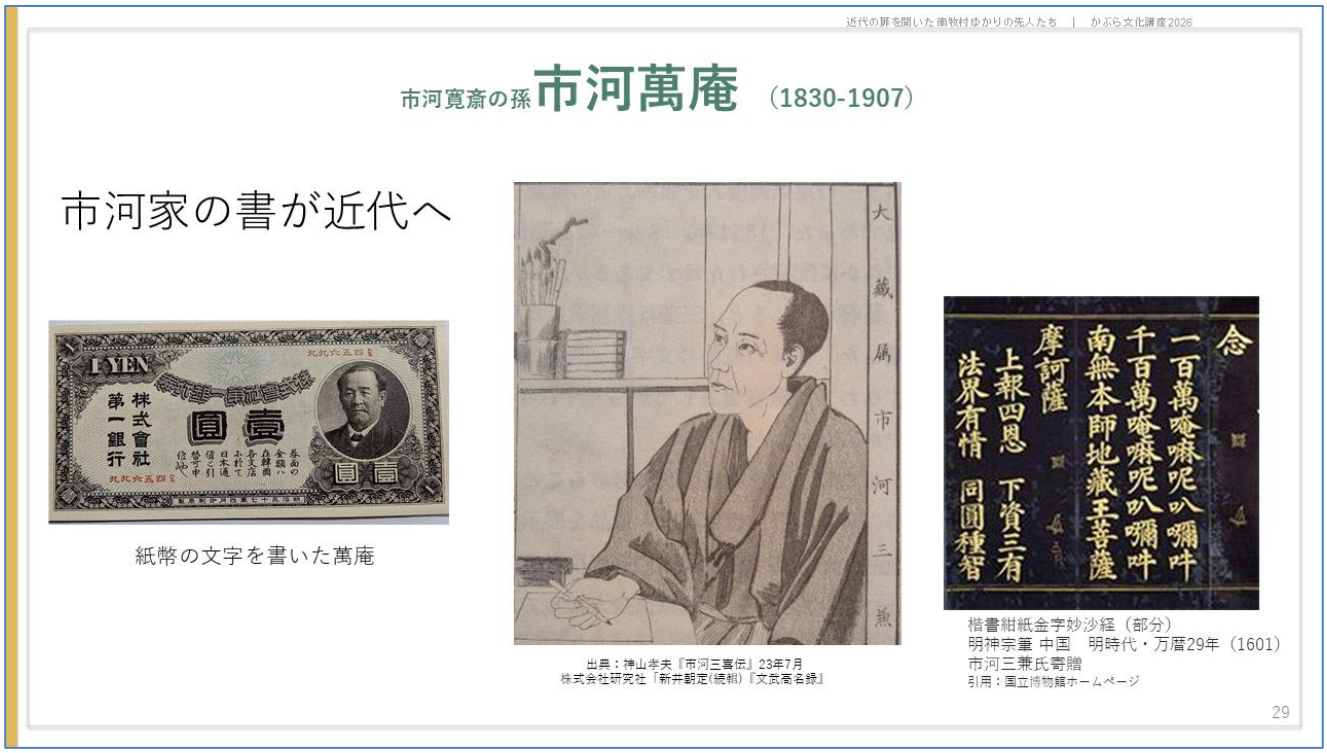
また米庵は「幕末の三筆」の一人に数えられる書家で、弟子は名だたる大名の尾張徳川家・加賀前田藩主から、当時の大名の 1/3 にあたる 80 家以上から江戸庶民まで、全国におよそ 5,000 人の弟子がいたといわれています。

そして現代でも書道作品を制作する際に必ず使われる『墨場必携』（ぼくじょうひっけい）を編纂したことから、「書道界のバイブルの生みの親」ともいえます。

この書道の作品に書くべき美しい言葉をまとめた著作は、いわば元祖・書道の教科書でもあり、江戸時代に彼が作ったシステムが、200 年近く経った令和の現代でも、日本中の書道家に使われ続けています。

また、米庵は書くだけでなく、中国の古い書物や文房具の日本一のコレクター（研究者）でもありました。そのコレクションは遺族から国へ寄贈され、国立博物館東洋館設立の基になっています。**［出典：市河三陽稿、市河三次訂『書道研究』1991 年 2 月　特集市河米庵伝］**

スライド 29



解説

米庵の子・市河萬庵は、祖父・寛斎と父・米庵から受け継いだ書と詩歌、そして篆刻に秀でるとともに、幼少より斎藤弥九郎の道場で剣術を学んだことから武技への関心が高く、数え 12 歳から砲術家高島秋帆(1798～1866)の徳丸ヶ原での砲術演習に非公式で参加し、数え 15 歳には幕府の砲術試験に 10 発必中により合格、やがて幕府鉄砲方として高島とその門下の江川太郎左衛門(1801～1855)と行動を共にします。

[出典：新井朝定(続編)『文武高名録』1893]

また市河萬庵は、維新後、明治新政府の大蔵省・民部省に斎藤弥九郎とともに出仕し、その優れた書才を認められ、明治 3 年（1870 年）新政府が偽札防止のためにイギリス・ロンドンの企業に発注して製造したわが国初の近代的お札（「明治通宝」などの中央紙幣）の原版となる美しい毛筆文字を書いたとされています。

[出典：講談社『日本人名大辞典』「市河万庵」](https://kotobank.jp/word/市河万庵-15324)

そしてなにより文化史上の大切な仕事は、米庵ゆかりの収集品を後世へ伝えたことです。東京国立博物館には「市河三兼氏寄贈」と記された作品が数多く残り、国立博物館ではこれまで数度にわたり特別展を開催しています。

米庵の没後に散逸した収集品を萬庵が再び集め、博物館へ寄贈したことで、広く鑑賞・研究できる国立博物館東洋館充実のもととなりました。

[出典：東京国立博物館「市河米庵コレクション」](https://www.tnm.jp/modules/r_exhibition/index.php?controller=item&id=556)

スライド 30



解説

萬庵の子・市河三喜（1886～1970）は、日本人として初めて東京帝国大学（現・東京大学）英文科の教授となり、日本の英語学・英語教育の発展に大きな役割を果たした研究者です。

三喜博士自身は東京生まれですが、その知性の源流である市河家のルーツは、群馬県甘楽郡南牧村（旧・磐戸村大塩沢）にあります。南牧の厳しいながらも豊かな自然と風土が育んだ不屈の精神と卓越した知性は、時代を超えて日本の文化を支え続けました。

［出典：神山孝夫『市河三喜伝』2023 年 7 月株式会社研究社］

三喜は大正 5 年、渋沢栄一の初孫（長女・歌子の娘）である晴子を妻として迎えます。当時の渋沢栄一といえば、日本中の産業や社会活動を牽引し超多忙を極めていましたが、この結婚式には栄一自らが列席しました。

そして、妻となった晴子夫人は、祖父・栄一譲りの豊かな才能を受け継ぎ、紀行文を著しました。三喜の欧米視察旅行に同行した晴子夫人は、当時の世界の息吹を生き生きと瑞々しい文章で記録し、名著『欧米の隅々』を出版して世間を驚かせました。

［出典：市河三喜・晴子『欧米の隅々』昭和 8 年 6 月株式会社研究社出版］

スライド 31



解説

幕末の南牧には、信州へ向かう渋沢栄一や尾高惇忠らと、市川家の人々との交流がありました。南牧を経て佐久へ向かう道は、旅の道であると同時に、学問や交際の道でもあったのです。

六代目五郎兵衛の子である健吾と万平は、それぞれ別の家を継ぎ、明治の地域社会で役割を担いました。ここでは血縁だけでなく、養子縁組、学問、旅先での交流など、いくつもの関係が重なっています。南牧の歴史が近代へ続く姿を、こうした具体的な交際からたどることができます。

[出典：佐久市五郎兵衛記念館「第 4 回富岡製糸場と渋沢栄一と市川五郎兵衛の子供たち」『館長の豆知識』(佐久市ホームページ)](https://www.city.saku.nagano.jp/bunka/sakubun/gorobekinenkan/mamechisiki/mamechisiki4.htm

スライド 32



解説

市川万平、後の竹井澹如（1839～1912）は、南牧の羽沢に生まれました。澹如の功績は、現代の熊谷の基礎を築いたと言われるほど多岐にわたりますが、先駆的な足跡が３つあります。

第一に、日本の近代化と「富岡製糸場」へとつながるシルク産業の発展です。

澹如が生まれた甘楽地方は、古くから上質な繭（まゆ）を生産する養蚕の盛んな地域でした。澹如はその郷土の DNA を受け継ぎ、熊谷の地でシルク産業の興隆に尽力します。彼は渋沢栄一や尾高惇忠らとも交流し、養蚕・製糸業をはじめとする地域産業の発展に関わりました。また、製糸場支援のため熊谷を、周辺の良質な繭が集まる一大集散地へと育て上げ、それは熊谷に日本最大規模の製糸工場（片倉工業熊谷工場）の誕生となり、富岡製糸場とともに日本シルク産業を世界一へと押し上げる原動力となったのです。

第二に、熊谷を「埼玉北部の中心」へと押し上げた行政手腕です。

明治初期、彼は埼玉と群馬県域を一つとする「熊谷県」の新設を果たし、インフラ整備を猛烈に進めました。その後解消され新設された埼玉県の初代県会議長に就任し、地域のリーダーとして近代化の舵取りを担いました。

第三に、私財を投げ打ってでも地域を守る「利他の精神」です。

1869 年（明治２年）、荒川の堤防が決壊した際、澹如は自らの全財産を投げ打って決壊を防ぐための突堤（のちに住民から感謝を込めて「万平出し」と呼ばれます）を築きました。自分の利益ではなく、住民の命と暮らしを最優先に考えるその姿は、多くの人々の心を打ちました。

［出典：斎藤茂八『竹井澹如小伝』昭和 35 年 4 月竹井澹如翁碑再建の会］

スライド 33



解説

澹如の生涯の根底にあったのは、南牧村の峻険な山々が育てた「粘り強さ」と、人を思いやる「温かい心」です。それに加え若くして江戸へ出て、江戸三大剣道道場の斎藤弥九郎の「練兵館」で桂小五郎、高杉晋作とともに剣術を学び、下宿していた一族の市河米庵の人脈から最高の学問をも学んだことが、彼の人生で大きな力となります。

澹如は晩年、今も熊谷市のシンボルとして愛されている名勝「星溪園（せいけいえん）」を作庭します。この美しい庭園に渋沢栄一をはじめ、日本の近代化を担った多くの人物、大隈重信、後藤象二郎、品川弥次郎、板垣退助、福沢諭吉などを招き、国の未来や産業の発展について熱く語り合いました。

また、澹如の仕事には、洪水への対策、県庁の誘致、学校の設立などがありました。明治 9 年（1876）には、学校の設立にも関わり、明治 38 年には当時東京で学ぶことが困難な多くの県民の子弟のため、渋沢栄一とともに埼玉全県民に広く呼び掛け、東京に埼玉出身の苦学生のため寄宿舎と奨学金制度「埼玉学生誘掖会」の設立も果たしています。これらを通して見えるのは、災害から暮らしを守り、行政の拠点を整え、人を育てるという地域経営の姿です。澹如はまた俳諧の交流を支え、文化活動にも力を注ぎました。

[出典：斎藤亜具『埼玉学生誘掖会 10 年史』大正 3 年 10 月財団法人埼玉学生誘掖会、熊谷市 Web 博物館「澹如と耕一郎」](https://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/jousetu/seikeiennoheya/tanjotokouitirou.htm)

スライド 34



解説

万平の兄・折茂健吾は、折茂家を継ぎ、幕末から明治の激動期に地域行政の先頭に立った人物です。明治 11 年（1878）には緑野（みどの）・多胡（たご）・南甘楽（みなみかんら）三郡の初代郡長に就任し、広大な地域の近代化を担いました。

実は、世間ではほとんど知られていませんが、熊谷県の誕生や荒川の治水に命を懸けた政治家・竹井澹如（たけいたんじょ）は、健吾の実の弟にあたります。このことからも、幕末から明治にかけての激動時代、南牧に関係する彼らが幅広い活動をしていたことがうかがえます。

健吾の活動の特徴は、地域の未来を見据えた幅広い人的ネットワークにありました。初代富岡製糸場長の尾高惇忠とは深い交友を結び、また渋沢栄一らとも密接に連携しながら、近代日本の大動脈である養蚕・製糸業を地域に根付かせるために奔走したのです。

さらに、近代養蚕の世界的リーダーとなった「高山社」の創設者（高山長五郎）たちは健吾の後輩にあたり、健吾はその強力な事業継承者（バックアップ役）として高山社を陰で支え抜きました。

黒沢正則氏の著書『広域蜂起　秩父事件』や『藤岡・秩父自由党事件』にも描かれている通り、明治 17 年の秩父事件の際、高山社の門下生たちが事件に深く関与する中で、健吾は郡長としていち早く政府への報告や対応に当たりました。

明治の新制度をこの地に定着させるため、土地の事情を誰よりも知り、人々と交渉できるリーダーとして活躍した折茂健吾。彼の歩みは、技術、そして渋沢栄一ら時代の先駆者たちとの深い絆が、地域の近代化に関わったことを今に伝えています。

スライド 35



解説

用水開発、学問、書、地方行政をたどると、南牧ゆかりの人々は、それぞれの仕事を通して地域の外と結ばれていました。専門技術を持つ人、資金を出す人、教える人、土地の事情を知る人が出会うことで、一人ではできない仕事が実現しました。

本講演でいう「関係力」は、この協力を生み出す力です。地域の歴史を考える際には、著名人の人数だけでなく、どのような知識や技術を蓄え、誰と結び付き、何を社会に残したかを見ることができます。南牧の歴史は、その具体例を豊かに伝えています。

スライド 36

380年間、水の恵みに毎日感謝される村
～先人のDNAを、未来に～



新潟県上越市大濱小学校の用水見学



長野県佐久市浅科小学校の年中行事の用水見学



今も続く感謝祭

これからの南牧村は、だれと、どのようにつながっていくのでしょうか。

出典：写真左：上越市立南川小学校ホームページ　https://www.minamigawa.joho.ed.jp/otayori/2017/4976/i/
写真中：長野県産業労働部　長野県観光情報ブログ　https://blog.nagano-kenjo/saiku/wodv/23619.html/5
写真右：長野県産業労働部　長野県観光情報ブログ　https://blog.nagano-ken.jp/saiku/viewspots/145.html